

令和6年 春季俳句講座

「第一句集を読む―師系を超えて(7)」

★第3回 山尾 玉藻 『群萌』 大石 悦子

「柔らかな遊びごころ」

大石悦子は古の詩歌や文学を基調とした独自の句境を開いた俳人であり、その深部には常に遊びごころが息づいていた。その遊びごころを探り学びたい。

動画配信日時 4月30日(火)10時より

山尾玉藻 略歴

昭和19年 大阪市に生まれる。

正岡子規直系の結社「火星」創始者岡本圭岳、

二代目主宰岡本差知子の長女として、幼少より俳句に親しむ。

〈ゆきがふるかもつにぶたがないてるわ〉 6歳作

〈秋のよるかあさんの方むいてねる〉 7歳作

平成2年 第1句集『唄ひとつ』上梓

同7年 「火星」主宰継承。

同8年 第2句集『鴨鍋のさめて』上梓。

同18年 第3句集『かはほり』上梓。

同14年 自註句集『山尾玉藻集』

同27年 第4句集『人の香』上梓。

同28年 『人の香』にて第56回俳人協会賞受賞。

令和5年 文化功労者として大阪府知事賞受賞。

現在 俳人協会評議員 大阪俳人クラブ常任理事。

日本文藝家協会会員。

大石悦子氏 略年譜

- 昭和13年 舞鶴に生まれる。
- 昭和29年 同郷の「鶴」同人工藤雄仙氏に誘われ、高校一年に
して作句を始め、初めて石田波郷を知る。(16歳)
- 昭和31年 「鶴」に入会し初投句。(18歳)
- 昭和32年 大学に進学し、学生サークルの一員として「天狼」に
も投句。
- 昭和37年 結婚。その後は子育ての爲作句中断。(24歳→28歳)
- 昭和42年 「鶴」再入会、波郷下にて作句再開。(29歳)
- 昭和44年 石田波郷没後は石塚友二、星野麥丘人、鈴木しげを
下で研鑽を積む。
- 昭和47年 「鶴」同人。(35歳)
- 昭和55年 結社賞である「鶴俳句賞」受賞。(42歳)
- 昭和59年 「遊ぶ子の」にて角川俳句賞受賞。(46歳)
- 昭和61年 第一句集『群萌』上梓。
- 昭和62年 『群萌』にて第10回俳人協会新人賞を受賞。以後
『聞香』『百花』『耶々』『有情』の4句集を上梓。(49歳)
- 平成25年 第5句集『有情』にて第53回俳人協会賞受賞。(75歳)
- 令和2年 第6句集『百轉』上梓。(83歳)
- 令和3年 『百轉』にて第55回蛇笏賞受賞。
- 第13回小野市詩歌文学賞受賞。(84歳)
- 令和5年 4月28日逝去。(85歳)

『群萌』前期作品 「黄水仙」抄「花まゆみ」抄「春あけぼの」抄

(昭和31年〜同51年) 17歳〜38歳

十七となりぬ芽に出て黄水仙

雪しづみゆく泉は雪のこゑがする

傘の内顔のぞかるる業平忌

鍛錬会に出席叶はば、向う一年、句会には
出でずともよしとわれから夫に言ひたれば

今日よりは汝が専ら妻菲の花

波郷先生亡し

喪ごころや葉牡丹に紅頭ち初めぬ

厚着して八方破れもよしとおもふ

花氷言美しく夫に侍し

寒鮒の息づく濁りありにけり

嵯峨の時雨に待ちゐて肩を濡らせしよ

白酒に酔うても見せて夫のまへ

夢のつづきの夫こそありぬ春あけぼの

桃咲いて女の一世遊よべること

あやまちて吾にこぼれ来し恋雀

牡丹や人に伏目をおしとほす

『群萌』中期作品 「水かげろふ」抄 「遊びをせむとて」抄

「菱の実」抄

(昭和52年〜同57年) 39歳〜44歳

古い父のたふさぎを縫ふ夜涼かな

さざめきて師に蹤きゆくや草の花

発心の書初古今恋の歌

病む父に打ちてしまひぬ追儼豆

憶ふこと明日へ剩しぬ夕ざくら

夏帽の縁固くして人嫌ひ

端居して夫も親しきものうち

十薬の花びらほどを父糞りぬ

寒紅を引きて瞋りのなかにをり

女歌と蔑まるるや黄水仙

てふてふや遊びをせむとて吾が生れぬ

手の窪を文篋としたり落し文

菩提子を父よ母よと拾ひけり

加茂茄子の田楽とぞ箸あやまつな

独活食みし口を大事に嚙みけり

青畳月に漣なせりけり

恋猫の恋の果なる勾玉寢

『群萌』後期作品 「遊ぶ子の」抄「野梅」抄

(昭和58年〜同61年) 45歳〜48歳

灯取虫ときには吾を取らむとす

ゆりかもめ白刃となりて吾に降り来

いくたびも鏡見る日や吾亦紅

寒紅や心隈どるごとく引く

栗虫の麻呂と謂へるが出できたり

溝跳んでいま見し花を忘れけり

水飲みし身が棒立ちに夕桜

おもしろの世の夜桜と仰ぐかな

単帯水のごと展べ形見わけ

来信に秋風の句やそこより風

ゆふぐれは地よりむらさきしきぶの実

あはうみや三日の女波たたみゐて

霜月や去年知らざりし遊びして

いまになほ恋を習うて歌かるた

悼 石塚友二先生

皮手套葬後の指を嵌め違ふ

くれぐれとまゐりて花の熊野かな

みづうみへゆらりと抜けし茅の輪かな